

第1回 「新たな「京都市動物園構想」の策定」検討会議 議事摘録

日時：平成30年8月14日（火）午後2時～午後4時

会場：京都市動物園 レクチャールーム

出席者

【委員】

池田 泰子 市民公募委員
今村 礼子 市民公募委員
澤邊 吉信 岡崎自治連合会会長
中道 正之 大阪大学大学院人間科学研究科教授
福井 亘 京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授
藤井 容子 京都岡崎魅力づくり推進協議会 魅力情報発信担当マネージャー
松本 朱実 動物教材研究所 pocket 主宰 甲南大学非常勤講師
森村 成樹 京都大学野生動物研究センター特定准教授
湯本 貴和 京都大学霊長類研究所所長・教授

(欠席)

本多 和夫 平安神宮 宮司

【事務局】

(文化市民局)

文化担当局長 北村 信幸
文化芸術都市推進室長 尾崎 学

(動物園)

園長 片山 博昭
副園長 坂本 英房
総務課長 山本 孝
種の保存展示課長 和田 晴太郎
生き物・学び・研究センター長 田中 正之
総務課庶務係長 牛丸 昭
総務課 岩浅 拓也

(コンサルタント)

株式会社地域計画建築研究所 原田 稔, 三浦 健史, 嶋崎 雅嘉

【オブザーバー】

環境管理課長 濱口 弘行
公共建築企画課長 古川 吉則
公共建築企画課課長補佐 樋口 博紀
公共建築企画課電気企画係長 薄波 孝生
公共建築企画課 大野 達三
教育委員会学校指導課長 諏佐 準一

進行役あいさつ（動物園総務課長 山本 孝）

- ・本日の会議は公開になっていることについて確認する。

1 開会の挨拶（京都市文化市民局文化担当局長 北村 信幸）

- ・厳しい暑さの中、また、お盆の真っ最中に集まっていただき、感謝する。
- ・明治36年にできた、我が国2番目に歴史ある動物園。
- ・平成20年には、京都大学との連携により、研究センターを設置し、京大から研究員も迎え、体制を充実させた。
- ・平成30年5月には、厳しい審査を経て、世界動物園水族館協会（WAZA）への加盟が承認された。
- ・ラオスとの像の繁殖プロジェクトにも取組み、4頭の子象を迎えた。
- ・新動物園構想に基づいて、足掛け7年整備してきて2年半前にグランドオープン。平成27年度の来園者は120万人。27年度をピークに若干減少の傾向もある。
- ・子供だけでなく大人も楽しめるということも必要。インバウンドの動向を考えることも必要。岡崎地区全体での連携ということもあるだろう。
- ・現在、市内の植物園、水族館などと連携、今後は移転予定の市立芸大との連携もある。生物多様性、地球温暖化の観点からも取組の充実が求められている。
- ・動物園に対しては、多方面からの要求もあり、期待も寄せているところである。動物園の4つの機能の充実、世界水準での充実を考えたい。
- ・先生方の知見をいただいて構想にしていきたいのでよろしくお願ひしたい。

2 出席者紹介 検討会議委員及び京都市出席者の紹介

（検討会議委員の自己紹介）

池田委員

- ・動物園など自然関係施設に関するデザインの仕事をしている。
- ・NPOでオランウータンや像の保全などの活動をしている。

今村委員

- ・市民委員。デザイナーをしている。
- ・動物が大好き。子供の頃はそうでもなかったが、大人になって好きになり、動物モチーフのものなら何でも欲しくなる。
- ・現在、京都市動物園では大人も楽しめるイベントが行われている。これからも、大人だけでも、独身OLでも行ける、みんな来やすい動物園になってほしい。ファンとして参加したい。

澤邊委員

- ・岡崎自治連合会の会長。この地域を離れたことない。
- ・動物園の香りをずっとかいてきた。朝は動物の大きな声で目覚める。
- ・前回は委員をさせてもらった。動物園の整備が進み、大変きれいに、素晴らしい環境になった。
- ・ルームシアター等、岡崎エリアの様々なことに関わっている。

中道委員

- ・大阪大学に所属しているが、生まれは京都。こういうところに声掛けしてもらえるのはうれしい。
- ・改修前のキリン舎、猿舎を知っている。そこでの行動研究をしていた。整備前後での研究ができている。
- ・現在、哺乳類の行動研究をしている研究室所属なので、学生も研究させてもらっている。
- ・新しい動物舎、動物園構想に関われることを大変うれしく思う。

福井委員

- ・京都府立大学で、ランドスケープ、景観生態学の研究をしている。
- ・鳥類が好き。それを設計に生かすようにしている。

藤井委員

- ・京都岡崎魅力づくり推進協議会に所属。10年前の構想の際に動物園大好き市民会議の市民委員ワークショップに参加したことがきっかけで、岡崎のまちづくりに関わるようになった。
- ・これまで動物園とは、大人の動物園探検を一緒にしたり、歴史を紹介する本を作ったり、講座型のセミナーをしてきた。動物園について、文化歴史という「違う側面」から紹介することを進めてきた。
- ・新たな動き、視野が広がるようなことがあるとよい。

松本委員

- ・多摩動物園で学芸員をやっていた。今はフリーランスで、動物園と学校をつなげたり、教材を作ったりしている。
- ・いかに、子供、利用者、市民が動物園で何を体験し、どのように学ぶのか、どのように寄り添いながら作っていくのかを、学習論を研究する立場から考えたい。

森村委員

- ・京都大学野生動物研究センター熊本サンクチュアリ所属。専門は動物福祉。平成8年から動物園で動物の行動研究をしている。
- ・この20年で日本の動物園も変わってきている。
- ・京都市動物園とは協定を結んでいるので、共同でシンポジウムをしたりしている。
- ・新しい動物園の構想を考える場に呼んでもらって感謝している。

湯本委員

- ・京都大学霊長類研究所所長。動物の専門家と思われがちだが、ベースは植物生態。植物に来る昆虫や鳥、動物に関する研究をしている。
- ・京都市の環境審議会委員。生物多様性部会。
- ・動物園の役割として、生物多様性を訴えることも大事。京都市動物園には「京都の森」など京都の環境を伝えることができるようになってきている。これらを活かしていくことを考えたい。

事務局紹介

- ・文化市民局，動物園，他，環境管理課，公共建築企画課など，関係部局の職員が出席している。

3 座長選出・挨拶

森村委員

- ・湯本委員を推薦する。

全委員

- ・承認。

(座長挨拶)

湯本座長

- ・皆さんのいろいろな思い，お考えをできるだけ多く吸い上げて，みんなのための動物園にしていきたいと思う。よろしく願います。

(資料確認)

4 討議

湯本座長

- ・活発な意見をいただくよう願います。
- ・配布資料に基づき，新たな動物園構想は何かということについて共有するために，事務局から説明をお願いしたい。

(資料説明)

坂本副園長

- ・開園から 100 年経過し，老朽化も進んでいた。平成 21 年 3 月に動物園大好き市民会議が立ち上げられ，各 5 回ワークショップを開催して，新京都市動物園構想が策定された。
- ・順次整備が進み，平成 27 年にグランドオープン。子象もきた。47 億円の費用をかけて整備された。
- ・入園者数は増えた。整備が始まった時から徐々にアップして，グランドオープンした年に前年比 50% アップ。整備後，40 歳代，50 歳代の利用が増えたという印象がある。
- ・入園料収入も入園者の増加に伴いアップした。運営費の推移とあわせてみると，平成 27 年度は大きく黒字。ただし，この 2 年は減りつつある。
- ・教育的な効果ということで，中学生以下の入園者のグラフを掲載している。平成 24 年度に対しては 15% 増。入園者数は減っているが，団体数は増えている。
- ・講演の実績としては，京都大学との連携や生き物・学び・研究センターができたことにより，増えてきている。しかし，講演場所がレクチャールーム 1 つしかないので，全ての要望には応えられず，今の回数が上限かなと感じている。
- ・来訪者の満足度としては，全体的に整備の効果が評価されている。
- ・取組の現状としては，各種動物の繁殖に取り組んでいる。絶滅危惧種の繁殖にも取り組んでいる。直接飼育から準間接飼育というやり方になってきている。
- ・グレービーシマウマ。イギリス，オランダの動物園と共同で行っており，赤ちゃんも生まれた。

- ・ツシマヤマネコの保護増殖事業にも取り組んでいる。暮らせる環境を作ることが最も大きい。域外で繁殖させて増えた上澄みを域内に戻す。環境省の現地ステーションへ返せたらよい。昨年、本州で初めて、ツシマヤマネコ出産。帝王切開となったので人工保育となった。環境省の人とも相談して、今年度の繁殖についてどうするか考える。
- ・イチモンジタナゴは平安神宮の池だけにいる。京都市動物園で繁殖を成功して、平安神宮や琵琶湖に返せたらと思う。市民にも参加してもらい、取り組んでいる。
- ・教育普及活動として、シドニー大学から学生が実習に来ている。博物館実習などで受け入れている。
- ・植物園、水族館、科学センターの4園間での取組も行っている。野生動物研究センターの研究者の講演や音声を可視化して体験してもらうワークショップ、ツシマヤマネコをテーマとした「やまねこ博覧会」を開催している。
- ・6つの課題がある。「動物福祉への配慮」「生物多様性、地球環境保全、環境教育の充実」「インバウンド対応の多言語化」「中長期的な展示計画。持続的な展示計画の検討」「猿ワールドの施設の築年数が古い状況から様々な課題が発生」「入園者が減少気味」。これらの課題に対応するための5つの柱の設定を検討した。
 - ①生物多様性の保全に力強く貢献し日本をリードする動物園
 - ②文化教育施設として日本国内のオンリーワンを目指す動物園
 - ③比較認知科学や動物福祉に関する研究を推進する世界水準の動物園
 - ④「近くて楽しい動物園」の更なる進化
 - ⑤多くの人が集い、多くの学びを広げる動物園
- ・このように、5つの柱と24の施策に整理しているが、委員の皆様にご意見をいただき、より良いものにしていきたい。

湯本座長

- ・5つの柱と24の施策の充実が委員会のミッションであると思う。
- ・ご質問等があればお願いしたい。

池田委員

- ・24の施策はいいと思う。
- ・京都市動物園は他の動物園と比べてもレベルが高い。
- ・今の状態だと、未来永劫に心がけなければならない目標と、まだ50%の状況だが具体的に進めていかなければならないものと両方書かれているように思う。

坂本副園長

- ・評価いただくのはありがたい。保全にも取り組んできたがまだ道半ば。特に、動物園だけではなく、様々な団体、市民と一緒に取り組んでいくということについてはこれからだと考えている。達成度も様々であり、スタッフでもいろいろと考えている。全てにおいて手を入れていくべきとは思っている。

湯本座長

- ・5つの柱と24の施策はこの検討会議でどこまで触ることができるのか。

片山園長

- ・5つの柱，24の施策はスタッフで絞り出したものであり，柱や施策の数などは自由にしていればと思う。行政職員が考えたので硬い表現になっている。これから市民の皆さんと構想を育むにはもっといい表現があるのではないかと。そういう部分についてもご意見いただきたい。

湯本座長

- ・でき上がるまでのプロセスも重要である。パブコメや委員会が重要。まだまだ意見によって変わる可能性があるということを確認した。

松本委員

- ・入園者数，運営費，講演回数などを資料で示してもらったが，来園者の満足度などはどのようなアンケート調査を行ったのか。学びの評価が大事だと思うが，それについての調査はあるか。

坂本副園長

- ・毎年アンケートをやっていて，どこから来たか，年齢などのフェイスシート，イベントなどへの評価，サンプル数は200～400といったレベル。必要であれば，次回までにアンケート全体の資料を提供できる。
- ・保全の取組についての評価などはアンケートでは聞いていないので評価できていない。

片山園長

- ・資料5ページに講演についての記述があるが，学校団体，地域団体などから講演依頼があつて，レクチャールームで行ったり，出張したりしている。概ね，高い評価を得ている。洛西ニュータウンの自治会には毎年呼ばれている。人材という宝物があると感じる。もっと活用していきたいと思う。
- ・シドニー大学獣医学部から生徒が6人くらい来てくれている。満足度が高く，後輩に素晴らしいと伝えてくれて，継続している。一方，飼育技術者も学生をアテンドすることは大変だが，自分の仕事を振り返るきっかけになると言ってくれている。また英会話の練習にもなるのでよいという意見もある。京都市動物園ならではの取組なのでオンリーワンの試みと自負している。

湯本座長

- ・シドニー大学の獣医学部は世界的に非常にレベルが高い。生物多様性プランにとっても重要な事業であるといえる。

福井委員

- ・5つの柱はたたき台ということを示されているが，その中で2と3に興味がある。
- ・生き物・学び・研究センターは我が国初めてのもの。動物園にこれだけのものがあるというのは意義がある。そこは広げてほしいと考えている。
- ・動物学を中心としたセンターではなく，理系文系両方であり，社会学などにも波及していくことをもっと押し出してもよいのではないかと。都市の生物多様性，社会学，文学も含めて，理系だけではないということができるとうい。

- ・岡崎という場所が非常に良い場所であるが、現在の動物園では歴史的なものの紹介が薄いのではないか。歴史があってその上に動物園ができています。法勝寺があった場所で、日本で一番高い塔があったことなど、来園者のどこまで知っているのか？
- ・もともとは苑池であったところで、東山を借景としてつくっている。動物園で借景のきれいな空間はほかにはない。そういう観点を施策の中にも入れていければと思う。

片山園長

- ・研究機関は、生き物・学び・研究センターという名前であり、動物学研究だけではないということの特徴としている。大学の幅広い分野と連携したり、造園的なことについても共同研究とすることも考えられる。トータルな緑環境について、動物や人間との関係性の中で考えられる。
- ・歴史条件のアピールについては、力を入れていきたいところである。

湯本座長

- ・研究センターは今後人数が増えるわけではない。共同研究をもっと進めていくことを考える。いろんな研究者に手伝ってもらえるようにすればよい。
- ・借景も重要。景観政策により邪魔になるようなものは今後も建たないだろう。

藤井委員

- ・施策 17 に関連して、園内の景観改善が急速に進んでいる。園内の植物整備や、柵をビニール製から竹に変えたり、工夫されている。園が独自でやるのは大変なので産官学連携でできればよいのではないか。また景観改善に取り組んでいることを伝えるのも大事だろう。まち歩きなどと連携して広がっていければと思う。
- ・施策についてはどれも素晴らしいが、どれも主語が動物園に思えて、大変だと思う。ここで働く職員の労働環境の改善も大事ではないか。やりがい搾取のようにならないようにしていく必要がある。泣く人が出ない仕組みが大事。
- ・施策 17 に書いてあるとおり、国指定の「京都岡崎の重要文化的景観」地域内にあるのみならず、「重要な構成要素」のひとつとして京都市動物園は選定されている、とあるが、動物園の多面的展開ができればいいのではと思う。

湯本座長

- ・ここには汚いものがない。他の動物園では、いろんな人が変なものを寄付しているところもある。ここは目障りなものがないというのは工夫されているところだろう。
- ・労働環境の話も出たが、ボランティアの受け入れについてはどうか。

和田課長

- ・京都市動物園ボランティアーズとして、おとぎの国でふれあいをしてもらう橋渡し役となる大学生から大人まで 45 名が登録されている。一世代前までは大学生が多かったが、今はシニア世代が多くなっている。他にはサポーターとして市民や企業など。ガイドやグリーンボランティアについて検討はしているが、まだ実現していない。これからは多言語についても充実していきたい。

森村委員

- ・京都市動物園の働き方改革はどうなっているのか。新しい構想があるということは古い構想があるということ。どういう風に変えていくのか。プラスアルファだけではいけない。全ての動物園が時間のバランスを作っていくことに苦勞している。次世代の動物園で働くということはどういうことか、位置付ける必要がある。マンパワーのほか経済的な問題もある。
- ・人口減少ということは低収入になる。京都市の人口はほぼ横ばいだが京都府では減少。これまでの30年とこれからの30年は違う。よい政策を出しても財源のことを考えていく必要があるだろう。すでに検討されていればまた教えて欲しい。

湯本座長

- ・本当に実現するのかということである。お金の話とマンパワーの問題。

片山園長

- ・24の施策では、動物園の人的資源の在り方、園長、飼育技師、内部の人材育成や運営面について踏み込めていないという反省がある。委員のアドバイスをいただきながら、市民の方に知っていただく必要があると考えている。
- ・動物園に来て1年半になるが動物園が大好きになっている。毎日が学び。そこで獣医がガイドツアーをしたり、センター長が猿のガイドをしたり、飼育員が食事のガイドをしたり、皆が精一杯やれることを全てしているという感じがある。
- ・疲弊感もある中で、取捨選択して、伸ばしていくものがある一方、やめていくものがあると思っていて。動物園をリードしていく存在、世界水準ということを考えると見直しのチャンスをもたらしていると思う。

和田課長

- ・やりがい搾取的なところはあるが、提供したい部分と、来園者から求められている部分で噛み合っていないことがある。そこは省いて噛み合っているところを伸ばしていくという視点が取れるとよい。
- ・得手不得手もあり、得手のところにて全て配置できるものでもない。人が入れ替わる段階で、どういう人材を育てていくか、中長期の採用、育成ということを考えていくことが大切と考えている。

藤井委員

- ・どのあたりが噛み合っていないと感じるのか。

和田課長

- ・やりたいという思いが職員の中にある。今の仕事にプラスしてやり切れるか、やる気はあるが、本来の業務を割く面があるのでそこは上手にマネジメントしていく必要がある。

湯本座長

- ・やる気があることはモチベーションだが、例えばどんなことか。

和田課長

- ・短時間しか出来ないが、準備としては長時間かかる、など。周りの人と思いを共有し合えれば、仕事を分散できるのだが、共有できないと一人で抱え込んでやってしまう。責任感が強いと抱えてしまう。マネジメントが必要。

湯本座長

- ・大切なことなので、また考えていこう。

澤邊委員

- ・どのようにすれば 24 の施策ができるのか。大変すぎて、結局何も出来なかったということにならないようにと心配する。近所の身としては、皆が大きな負担にならないように取り組んでもらいたい。近所の人を利用してもらってもよい。地域の人が、生きがいや興味を感じ、人を連れてくる宣伝員にもなりうる。
- ・歴史を踏まえて、表現してもらえるとよいと思う。昔、こんなものがあつた、その中に動物園ができたという素朴なところを知ってもらふチャンスがあればうれしい。山も川もあり、景観を利用して、なごみの場ができればよい。

湯本座長

- ・動物をみない動物園ツアーがあつても面白い。

藤井委員

- ・すでに行っている。遺跡、琵琶湖疏水関連の現役産業遺産、植物・外構などを見るツアーを行っている。

中道委員

- ・平成 21 年の構想で、「他の動物園より狭いが、動物種が確保されており見劣りしない」という内容があるが、これはあり得ない。将来どれくらいの動物種になるのか。それがお客さんの数にも影響する。
- ・来園者が減少していることが否定的なことなのか、妥当なのか。120 万人の内訳はどうなっているのか。それを踏まえて、どのようにしていくのかを考えると、今後の見通しができるのではないか。
- ・狭い、都市部にあるというマイナス点をどのように克服していくのかというよりも、限界点を明確にすることによって、これからできることがあるのではないか。動物種については、どのような考え方が教えてほしい。

湯本座長

- ・動物園の本質的なことであるが、どうか。

坂本副園長

- ・今のところ、どのような絞り方をするのかという考え方は持ち合わせていない。中期的なコレクション

ョンプランを説明したが、今のスペースの中では立体的活用の可能性もあるとはいえ、限界がある。狭いと感じることは確かである。何を優先的に考え、何を減らしていくのかを検証したいと思う。ある意味働き方改革にもつながるのかもしれない。

湯本座長

- ・お客さんはゾウ・ゴリラに集中する。狭いところにはお客さんも来ていない。狭くてかわいそうと思われてしまうのは最悪。これについては大事な問題である。

片山園長

- ・本筋の課題だと考えている。9 ページに取り組むべき課題を掲げているが、中期的なコレクションプランについて記載している。構想と並行して議論をして作っていききたい。
- ・利用者はパンダ、サイなど、遠慮なく、好みの動物をリクエストしてくる。これ以上、土地を広げることがあり得ないので、動物福祉に配慮した動物数を考えたい。現在は、130 種類 600 頭羽。

湯本座長

- ・動物園の役割や考え方を来園者に伝えていく必要がある。他の都市ではゾウがいない動物園もあるだろうが、こういう考え方でゾウを展示していないということを来園者と一緒に考えてもらう機会づくりも必要ではないか。

和田課長

- ・最近で言うと、ふれあいの方式を「抱っこ」から「背中をなでる」ことにシフトした。「抱っこ」は近すぎて見えにくいということや、「抱っこ」だと一人だけになるが、背中を触るのは兄弟や父母と一緒に触れられるということがわかってきたので変えた。
- ・うちではこれを飼いませんと説明をする動物園も出てきている。こういう取組は京都市動物園でも必要だと考えている。現在は繁殖をする種、展示のみをする種というのは設定しており、今後の方向性として打ち出していければよい。

湯本座長

- ・30 年前は鳥の種数が豊富であったが、かわいそうな状況でもあったことを思い出す。動物園の役目も変わってきている。来園者に理解してもらう仕掛けが必要と思う。

今村委員

- ・昔と比べると、京都の森などが整備され、どちらかというと地味な動物も見てもらえるようになっている。上野動物園はメインが目立ちすぎて、他が閑散としているのが問題だと感じている。キリンの裏あたりは少し昔の名残があつてさみしい。
- ・フラミンゴが年をとっているということを知ってびっくりした。動物を知っている人にとっては当たり前ということでも、知られていないところがある。
- ・5つの柱について、細かいところを変えていくことで興味を持ってくれる人が増えるのではないか。
- ・最近、京都市動物園のフェイスブックが始められており、飼育員が書き込んでくれているので日頃のことが伝わって面白い。そのように、見に行った時だけでなく、24 時間生きている、働いている

- ということを伝えられる仕組みがあるとよい。見せ方、伝え方のちょっとした工夫で変わると思う。
- ・10～20年先のことを見据えた構想だとは思いますが、東京オリンピックで世の中も変わると思う。10年後には、これまでにない媒体が出てくる。社会の変化を意識した構想が必要。

湯本座長

- ・狭いことをメリットとすることも重要。上野は広くて疲れる。全貌がつかみにくい。京都市動物園は隅から隅まで回ることができる。狭さをうまく使うということが発想の転換としてはどうか。

和田課長

- ・広くないということはマイナスだが、動物との近さはプラス。そこは心がけていきたい。
- ・動物種の看板については既定のものにしているが、他は飼育員の個性を表現している。飼育員の顔が見えるようになってきた。
- ・最初はフェイスブックの更新は週に一回だけであったが、今は1日1つ以上投稿されている。
- ・最初は強制的な目標設定であったが、組織の体制として構築して即応できるものとしてやっていきたい。

湯本座長

- ・京都市動物園だけでなく、京都市全体が動物園になるということも考えられる。そこにうまく人を誘導できるように。
- ・オオサンショウウオを鴨川でなかなか見ることはできないかもしれないが、動物園は情報センターであって、京都盆地全体にひろげていく。イチモンジタナゴの取組もあるが、生域内外での保全。そういう機能は持つべきではないかと思う。

松本委員

- ・京都市動物園は歴史があり、京都市動物園だからこそできることがある。持続可能性という大きなミッションを市民と共有しており、SDGsには文化も歴史も含まれる。その一つの場として動物園の構想を考えることが大事である。
- ・働き方改革のことも出ていたが、いっぱいいっぱいの中で、動物園が主語という資料になっているが、主役は市民、活動場所は地域全体である。「一緒にやろう」というテーマを掲げられるとよい。市民科学的なところ、市民が何かを調べるということ、市民が動物園と何ができるのか、動物園で体験したことを暮らしの中にどう取り込み関連づけていくのか。

湯本座長

- ・一緒にやれるとすれば、植物園なども考えられる。

松本委員

- ・形の連携ではなく、何を目指していくか。やったやっただで終わってしまうのではなく、大きなコンセプトがいるのではないか。いかに豊かに暮らすのかということに動物園もタッチしていくということ。

北村局長

- ・京都市全域で景観政策を行ってきた。京都市全体が動物園という考えには感銘を受けた。小さな意味での動物園でしか考えていなかった。

湯本座長

- ・環境審議会でも SDGs で位置付けを直そうという動きが出ていた。

福井委員

- ・京都全域動物園のイメージはよい。研究センターがコアになって、糺の森、二条城などの緑のパッチがあり、マップにしてはどうか。そういうことをやった自治体はない。都市生態の中でまちを楽しめる京都というのが面白い。
- ・今後動物園としてどのように紹介していくのか、学校教育、教育委員会と連携してほしい。委員会が終わったくらいにその目安が付いているとすばらしい。動物園はこういうものであるということを授業の中に入れてもらおうとよい。
- ・ロードマップが必要だろう。動物園職員にはいろんな負担があるが、できることとできないことがあるだろう。5つの柱があるが、ロードマップとして緩やかにやれた方が負担も少なくなるのではないか。

諏佐課長（教育委員会）

- ・小学校教員をしていて、2年前までは校長をしていた。
- ・動物園に遠足で来ることは多いのだが、学習という形で使わせてもらうことが以前は多かった。その際に、広さがグループ活動させるのにちょうどよい。グループにトラブルがあっても走っていける広さ。学校の目線から言ってもちょうどよい。
- ・小学校の教員が目的を決めるのに、園内マップを作ってオリエンテーリングをする。「エミューの目の色は?」、「フラミンゴはなぜピンク?」といった問題を作るのだが、今は教員が忙しく、動物園を下見して問題を作ることができていないので、子供を連れて歩くだけということになっていることが多い。
- ・飼育員目線でのオリエンテーリングマップで、現場に行かなければわからない仕掛けがあり、一時間程度で回れると楽しい。
- ・ただ、教科が増えてきている等、遠足で動物園に来るといった活動ができなくなっている。校外学習も教科に関連させないといけない。例えば、飼育員さんの仕事というテーマで学ぶ、学習プログラムを受けさせてもらう等。水族館は出前授業をしてもらった上で見学に行っている。
- ・学習プログラムを提供してくれると、関心を持ってもらえるし、家族にもつながると思う。

湯本座長

- ・施策の1つにもなるのではないか。
- ・先生も忙しいのでツールを開発して学校の先生が使うということは大事。工夫できるのではないか。

片山園長

- ・ありがたい話をいただいた。今まさに、松本委員にも入ってもらい、動物園としての教育プログラ

ムをつくりたいと思っている最中である。構想とも連動できると思う。

池田委員

- ・動物園に子供を連れて来るのは非常に難しいということであるが、どう連れて来るか、何に絡めるか、ということを考えればよい。プログラム段階から学校を巻き込んで考える。海外のチルドレンミュージアムでは、マップもものすごく細かく年齢で分けられている。そのうちの一つを選んで、親子で体験できたり、学校向けに提案できるものもあったり、プラス個別オプションもある。手間は膨大になってくる。そこでボランティアも活用する。
- ・環境教育については、松本委員に監修してもらって、ボランティアを行う上でどんなものが欲しいかなどアイデアを出してもらおう。誰が精査する必要があるが。コンセプトに基づいた組織が必要ではないか。
- ・他で行われているアーティストとの連携では、客観的に見て、動物園でそれをやる必要があるのかというものもある。ただの場所貸し的な考えのものもある。動物園自体のこれが必要というコンセプトを作らないと追いつかないのではないか。コンセプトは動物園だけでなく、園の方以外も参加して作っていければよい。

湯本座長

- ・京都市動物園憲章というのはあるのか。

片山園長

- ・5本の柱24の施策の上に理念的なもの、わかりやすい言葉でキャッチフレーズ的なものが必要かなと感じている。

中道委員

- ・海外の動物園では研究者が入っている動物園もあるが、研究者と飼育員が乖離した状態になっている。研究者がお客さんに話をすることができない状態。今の京都市動物園はよい状態。来園者数が増えるとしんどい状態になる。個人の力量に依存することになるので、これはうまくバトンタッチできるのかが重要。
- ・キリンの研究をさせてもらっているが、動物の歴史、生き様を伝えることができていない。冒頭の自己紹介でも自分の歴史を伝えているが、ゴシップのような歴史をみんな知りたがっている。どのように伝えていくか。若い時と年を取ってからの写真を並べておいてる園はない。
- ・中学校、高校などで、学年順にバトンリレーで調べていってもらおう。それを中学生、高校生にレクチャーしてもらおう。動物を生かして学内授業ができる。記録し伝えるということができる。

湯本座長

- ・中学生、高校生と共同して展示に生かすという発想は重要。高校生にこそもっと見て欲しい。

藤井委員

- ・上位概念が必要と感じた。
- ・生活と切り離さないという意見が大切。動物園と実生活が重なる工夫を。岡崎の地図を作った時に、

イラストに描いたゾウの種類が違っていると飼育員に指摘いただいた。そういうことがあると身近な動物モチーフと動物園がつながる。

福井委員

- ・近くには美術館もある。岡崎全体で盛り上げていく必要がある。

湯本座長

- ・動物園は小学生の時は楽しかった。
- ・いろいろな人を巻き込んでいくことが必要。

北村局長

- ・入場者数の最適化について、市役所の事業としては若干黒字。財源はおざなりにはできない。これについては次回以降も議論できれば。

湯本座長

- ・持続的ということは労働の問題、収入支出の問題にもなる。
- ・本日はこれで終わりたいと思います。

片山園長

- ・本日はお盆の最中にも関わらず集まっていただき感謝する。湯本先生のお導きで自由な意見をたくさん出していただいた。
- ・115年の歴史に培われた動物に対する姿勢や思いは、若い飼育員からも感じるどころだが、30年先輩の副園長は、若い頃、さらに30年先輩の動物に対する思いを見聞きし、今の後輩に伝えていつている。理念の継承、技術の継承ということをしていきたい。
- ・動物の力を発揮させていきたい。動物園という施設の力も発揮していきたい。職員の力も伸ばして発揮していきたい。これからも力添えをお願いしたいと思います。ありがとうございました。

次回日程：10月17日（水）午前10時～ レクチャールームにて。